宮崎大学教育文化学部紀要　人文科学　第12号（2005）１－７頁

# 文学としてのマンガ⑦
## ―― 引用の織物としての『犬夜叉』（高橋留美子作）――

山田　利博

**Comics as Literature（PartⅦ）**："Inuyasya"（by Rumiko Takahashi）as the fabric of the quotation

Toshihiro　YAMADA

次に取り上げるべき作品を思いつかず、２年半ほど中断していた「文学としてのマンガ」シリーズであるが、要望が強いためまた書くことにした。副題に掲げたように、今回取り上げる作品は高橋留美子作の『犬夜叉』である。けれど、マンガに詳しい向きはすぐにお分かりで、そうでない方には後で述べるように、この作品を取り上げるのはいささか遅きに失した嫌いがあるが、これにはわけがある。稿者が在住する宮崎にはよみうり系のテレビ局が無く、したがってこの作品がアニメ化されたものは今も地上波では放映されていない。もちろんアニメ化される以前にもその存在を知ってはいたが、同じ作者の『らんま1/2』（週刊少年サンデーに1987年36号から1996年12号まで連載）を稿者は余り評価していないので、コミックス等をチェックするのを怠っていた。ところがこの４月より、遂に宮崎でもケーブルテレビでこの作品が放映されるに及び、これから詳述するように、本シリーズで論ずべき価値ある作品と判定したので取り上げた次第である。例によって先ず、この作品の概括から始めよう。

### １．『犬夜叉』の概括

前節でも少し触れたように、この作品の初出は古く、1996年の『週刊少年サンデー』50号である（本稿を執筆している2004年９月現在も連載中。因みにコミックスはその時点で37巻。アニメは2000年10月から2004年９月までテレビ放映）。完結してからその構造を問うのが原則の本シリーズでこれを取り上げるのはやや異例だが、先にも記したように既にテレビアニメは終了しており、原作はまだ若干続く見込みだけれども、本シリーズの三作目でも述べた[1]ように、これは関連商品の販売の問題があるため（事実12月に４本目の映画が上映予定である）で、実質的には問題なしと判断したからである。例によって粗筋から始めてみよう。

舞台は一応日本だが、時は連載開始時の1996年（但し８年経過した現在でも、ヒロインは進学していないところを見ると、他の高橋作品にもほぼ共通して見られるように、この作品でもやはり時は止まっているらしい[2]）と、約500年前の戦国時代の２点を揺れ動いている。説明

しやすい現代の方から始めよう。

ヒロイン日暮（ひぐらし）かごめは、祖父の言によれば由緒ある（しかし、かごめは余り信じていない）日暮神社の娘で、祖父・母・弟という家族構成を見る限り、どうやら父親はいないようだが、それ以外はごく普通の中学３年生（どう見ても高校生にしか見えないのは稿者の目のせいばかりではないと思うのだが、この辺りの機微は既に本シリーズ第１作で触れた[3]）。しかしペットの猫ブヨが、結局すぐに見つかったのだが、かごめの15歳の誕生日に行方不明になり、境内にある、いわくありげな祠の中にある隠し井戸の方にいるようだとのことで近づいたところ、その涸れ井戸の中から妖怪（後に百足上蘹（むかでじょうろう）という名だと分かる）が突然現れ、かごめを中に引きずり込んでしまう。後に明らかになる神通力により、かごめは難を逃れたが、井戸から脱出したところ、そこは何と500年前の戦国時代で、神社の御神木として今もある、樹齢1000年の木[4]の幹に、赤い着物（後に火鼠の皮衣と分かる。後述）を着て白髪、頭に犬の耳が生えている少年が、矢で封印されているのに出会う。その少年こそ、人間の母と大犬の妖怪の間に生まれた半妖（はんよう）犬夜叉で、犬夜叉は50年前、妖怪のみならず全ての邪悪なものの力を高めるという四魂（しこん）[5] の玉を手に入れ、その力により完全な妖怪になろうとして玉を守る巫女の桔梗と争い、桔梗の放った封印の矢でその木に張り付けにされ、眠らされていたのであった。

物珍しげに犬夜叉をいじっていたかごめは、犬夜叉の封印を守る村人と、桔梗の妹で亡き姉の遺志を継ぎ、その村を守る巫女となっていた楓に捉えられ、既に老婆となっていた楓からそうした事情の一部を聞かされるのだが、その時再び百足上蘹がかごめを襲い、倒すには自分が通ってきた井戸（後に楓から、そこに妖怪の死骸を捨てておくと、いつの間にか消えてしまうので「骨喰いの井戸」と呼ばれていることを聞かされる）に追い落とすしかないことを聞かされたかごめは、再び犬夜叉が封印されている木（井戸と近い位置にある）の方へと向かう。実はかごめは桔梗の生まれ変わりであったため、近づくと犬夜叉は目覚め、かごめの横腹から出てきた四魂の玉（死の間際に桔梗があの世に持って行くと宣言し、その遺体とともに焼かれた）を食い、ますます妖力の増大した百足上蘹を倒すには自分の封印を解くしかないと言う。

命の惜しいかごめが抜こうとして封印の矢に手をかけると、矢は雲散霧消し、甦った犬夜叉は見事百足上蘹を木っ端微塵にし、かごめの眼力により四魂の玉も取り戻せるのだが、もともと玉を狙っていた犬夜叉は、今度はかごめを狙う。その時助けに駆けつけていた楓が犬夜叉の首に「魂鎮めの念珠」をかけ、以後犬夜叉は、かごめの「おすわり」という魂鎮めの言霊によりその念珠に地へと引き倒されてしまうことになる。この後二人は、実は桔梗は犬夜叉を封印した直後に死に（正確にはその時奈落という妖怪により瀕死の傷を負わされていたことが後に語られる）、顔の類似・常人には見えないものが見えること・体内に四魂の玉を持っていたこと等から、恐らくかごめは桔梗の生まれ変わりであろうこと等を楓から聞かされる。その時からかごめは、桔梗の生まれ変わりとして、再び世に出てしまった四魂の玉を守るという使命を負わされるのだが、玉を狙ってかごめのもとには様々な妖怪が押し寄せる。

後に徐々に語られるが、犬夜叉と桔梗は実は恋仲で、一旦は犬夜叉は桔梗のために人間になろうとまで決意したが、四魂の玉を狙う奈落が、二人の姿に化けてそれぞれに近づき、二人の信頼を壊した上に、桔梗に瀕死の重傷を負わせたために、桔梗はそれを犬夜叉の仕業と思い、最後の力を振り絞って犬夜叉を封印したのである。アニメだけの話[6] ではあるが、その回想を描く回[7] で妹の楓の言葉として、「あの時お姉さまは自分の命が果てることを知っていた。な

らば何故破魔の矢ではなく封印の矢を放ったのだろう。（中略）そして、お姉さまを憎み、四魂の玉を奪われ、封印されてしまった犬夜叉が、何故こうも安らかな顔をしているのだろう」という疑問が語られるが、その答えは言うまでもあるまい。つまり二人はそんな状態になりながらも最後まで惹かれあっていたわけで、そのように愛憎半ばする桔梗の姿を持つかごめに対する犬夜叉の気持ちは複雑で、話が終わりに近づいた現在でも、なかなか素直に振る舞えない。

その次にかごめを狙って来たのは、妖力はさほど高くはないけれども、こっそり人間を殺し、その死体を操る屍舞烏（しぶがらす）で、再び四魂の玉を食われつつも、犬夜叉の助けと、自分自身の知恵を使ったかごめの矢により、見事退治することは出来たのだが、その矢のために、四魂の玉は粉々に砕け散り、その破片は日本中に散らばってしまう。そのためかごめの使命は、四魂の玉のかけらを他の妖怪の手に渡さないために全て集めることに変じ、それには、たとえ体内にあろうともかけらが見えるかごめの目と、それを持っている邪悪な存在を倒す犬夜叉の力が必要ということになり、二人は楓の村を起点として、たまに現代にも戻りながら、諸方面に旅立つこととなる。

その途次で、父親を雷獣の兄弟に殺され、その仇を討ってもらったために共に旅することになった、子狐妖怪だけれども時として犬夜叉よりも精神的に大人な七宝（しっぽう）、祖父・弥菟（みやつ）法師が調伏に失敗し、奈落の呪いを受けたため、以後代々右手に、あらゆるものを吸い込んでしまうブラックホールのような「風穴（かざあな）」を持ち、また自身もそれなりの法力を持つ法師でありながら、女癖が悪いので度々トラブルを引き起こす弥勒、一族をこれまた奈落に滅ぼされ、唯一残った弟・琥珀は、四魂の玉のかけらを体に埋め込まれて奈落に操られ、人質同然とされているのを救い出さんとしている妖怪退治屋の女・珊瑚を仲間に加え、やはり四魂の玉のかけらを狙う裏陶（うらすえ）という妖怪の、その能力によりかけらを見つけ出そうという陰謀によって自身の墓土と霊骨を以て甦らされた桔梗なども絡みながら、四魂の玉のかけらのほとんどを集めた奈落一味と争いつつ、二人の旅は現在もなお続いているというのが、『犬夜叉』の粗筋である。

稿者がこれに惹かれたわけは、古典文学を専門とする者であり、この作品の時代設定が主に戦国時代だったからという単純なものでは決してない。そんなところに拘ってみても仕方がないが、稿者の専門は厳密には平安時代で戦国時代とは異なるし、高橋作品に詳しい者なら誰でも知っているように、彼女は以前『炎（ファイア）トリッパー』（週刊少年サンデー　1983年真夏の増刊号（８月号）初出）という、やはり戦国時代を主な舞台とするタイムスリップものを書いており、それは当時の高橋の力量もあって読み切り止まりだったのかもしれないが、たとえ今の力量を以て描いたとしても、そのままでは、この作品ほど分析に耐えるものとなるとは思われないからである。では何処にそれほど惹かれたのかは、節を改めて詳述したい。

## ２．引用の織物としての『犬夜叉』

現代文学とは異なる古典文学の魅力を奈辺に求めるべきかなどという壮大な問いに一言で答えることは所詮不可能であろうし、仮に可能であったとしても、一つに限定して良いものとは思わない。しかし、それを百も承知で本シリーズで出した答えは「引用」[8] であった。何故ならそこでも引用したロラン・バルトの言にもあるように、

> テクストとは多次元の空間であって、そこではさまざまなエクリチュールが、結びつき、異議をとなえあい、そのどれもが起源となることはない。テクストとは、無数にある文化

の中心からやってきた引用の織物である[9]。

からであり、しかも古典文学においてはこれが当然であるに止まらず、第一条件にすらなっていることを高橋修氏の言[10]を援用しつつ述べ、さらにはその技法が現代マンガには残存していることも明らかにした。その次の拙稿[11]と同様、本稿もその延長線上に位置するのだが、正にその「引用の織物」であることが、『犬夜叉』の一番の魅力となっていると思われるので、本節ではその点について論述してみよう。

前節に掲げた粗筋は、知識を共有すべく気を使って書いたつもりだが、それを読んで先ず気づくのは、『竹取物語』及び『南総里見八犬伝』の引用のはずである。何故なら、既に注意を喚起しておいたように、犬夜叉の着物は「火鼠の皮衣」であるし、かけらではないし、『犬夜叉』の場合八つではなく、無数であるのだが、日本中に散らばった玉を集めるというのは言うまでもなく『八犬伝』で、そう解いてみると、犬夜叉が大犬の妖怪と人間の母との間に生まれた半妖というのも、八犬士が妖犬八房と人間の女性伏姫との子という設定と良く適い、題名『犬夜叉』も、また同様に良く分かるのである。

ただ、犬夜叉の着る火鼠の皮衣は、火だけではなく、「ヘタな鎧より強」[12]く全ての攻撃から身を守るものだが、かごめを守るために犬夜叉がそれを貸し与え、猛火に包まれながらも、かごめには火傷一つ無いというシーンもある[13]上に、その次[14]に出てくる、昔その衣を犬夜叉に与えた母（尤もそれは、父の遺産を狙う犬夜叉の兄・殺生丸が送った刺客だと後に判明するが）は、巨大な満月を背景に十二単を着[15]、空飛ぶ牛車に乗って登場するから、一応人間という設定ではあるが、明らかにかぐや姫をイメージしていよう。またこれはアニメのみの設定ではあるが、『犬夜叉』の劇場版第２作『鏡の中の夢幻城』（2002年12月公開）では、最終的に犬夜叉と戦う妖女は神久夜（かぐや）だし、例によって奈落の一味が、封印されていた神久夜を解き放つために先ず集める品物というのが、順番こそ違え、犬夜叉の火鼠の皮衣を含めた５つの難題と完全に一致する[16]上に、それを手に入れる度に奈落の分身である神無（かんな）という妖女等が詠む歌も、もともと『竹取物語』に歌が存在しない龍の頸の玉の場合はその中の一節（もちろん原文）、その他のものは全て求婚者が受けたかぐや姫の歌という徹底ぶりから、ほぼこれを疑うわけにはいかないだろう。

これだけでも『犬夜叉』は既に２つの作品を引用していることになるが、察しの良い方はもうお分かりのように、もう一つ加えることが可能である。それは『西遊記』である。

かごめの「おすわり」という言葉により犬夜叉がずっこけるのはもちろん知っていたが、それが「魂鎮めの念珠」によるものとはアニメを見るまで知らなかったので、この点についてはつい最近まで気がつかなかったが、それが孫悟空の頭の「禁箍児（きんこじ）の輪」を絞める「金緊禁の呪」と同じものであることに気づけば、犬夜叉は、「犬猿の仲」による「猿」から「犬」へのずらしであることに思い至るのも容易であろう。しかも粗筋でも述べたように、犬夜叉は最初、御神木に封印されていた。言うまでもなくこれは、天上界で大暴れした孫悟空が、三蔵法師と出会うまで五行山に封じられていたことの引用であろう[17]。そしてそう解けてしまえば、他の仲間の七宝と弥勒は猪八戒の分離したもの[18]であろうこと、珊瑚（さんご）と沙悟浄（さごじょう）は漢字にすると確かに似ていないが発音は非常に近いから、恐らくそれのパロディであろうことを見抜くのも、また同様に容易であろう。ただそうなると、女であるかごめが三蔵法師となり、しかも犬夜叉と恋仲という設定に抵抗を覚える方もいるかもしれないが、稿者の年代では、故夏目雅子が三蔵法師を演じて好評だったテレビドラマの『西遊記』（第１

シリーズ1978年10月～1979年４月、第２シリーズ1979年11月～1980年５月、日本テレビ放映）があるからさほど抵抗は無い[19]し、それ以前にも例えば中島敦の『悟浄歎異』（1939年発表）の八戒の言葉のように、三蔵と悟空の関係を男色に近いと解するものもあった。そしてこのドラマ或いは中島の解釈も強ち無理とは言えないのは、三蔵法師は非常な美貌であると、原作の『西遊記』に語られているからである。つまり、この一事を以てこの可能性を否定することはできないわけである。

このように考えれば、『犬夜叉』は少なくとも３つの古典作品を引用していることになり、しかも本稿の考察が正しいとすれば、犬夜叉の「犬」は『八犬伝』の「犬」と『西遊記』の「猿」のずらしが重層したものとなろう。つまり個々の作品は別々に存在するのではなく複合しており、かつ、粗筋を読んでもお分かりと思うが、設定こそ類似するものの、話としては完全に別物である。そのようなものを「引用」と呼称して良いのか疑問に感ずる読者もいるかもしれないが、例えば本歌が秋の歌なのに春の歌となっている本歌取りの歌もあるように、文学における引用とは、「完全に同じ」という意味ではなく、むしろそこから脱して別の作品となっていることが望ましい。そういう意味では『犬夜叉』は、正しく「引用」であるし、しかもそれが複合しているのであるから、「引用の織物」と呼ぶにもふさわしい。そう判断して本シリーズに取り上げた次第である。

## ３．おわりに

以上で『犬夜叉』についての作品分析はほぼ終えたつもりであり、これ以上は推測で、学問の名に恥じるもののような気もするのだが、文学の研究とは難しいもので、100％の客観性を保証することは所詮出来ない。例えば本稿の叙述を前節で終えたとしても、そこに存在する証拠は作品中から拾った語句等であるから、稿者としては精一杯客観を目指したつもりでも、「そのようなことは全部お前の目に映ったことで、作者が考えていたかどうかは分からない」という、いわば全てをひっくり返してしまうような批判も成り立つわけである。最近の文学研究では自分の読みが最重要で、作者が実際にどう考えていたかは問わないことになってはいるのだが、稿者としては、それではますます客観性から遠ざかるような気がしてならない。そこで最後に、危険を承知で、本稿で述べてきたようなことは、無意識の「影響」ではなく、意図的に「引用」しているのだと思われることを証明してみたい。

高橋が稿者と同じくらいの古典の知識を有しているかどうかは分からないが、日本女子大を、しかも古典分野の卒論を書いて卒業しているし、そういう表面的なことだけでなく、彼女の古典の力の高さはその語彙から分かる。『犬夜叉』から１例を挙げれば、最初にかごめを襲った「百足上臈」という妖怪のネーミングで、女郎蜘蛛もいるし、現代人にとっては「女郎」という語の方が一般的と思うから、並の国語力の者なら「百足女郎」としたであろう。現時点で最大の国語辞典である『日本国語大辞典』第２版によれば、「女郎」と「上臈」は元来別語で「上臈」の方が古く、発音の近さ故に江戸時代頃「女郎」に統一されたとのことだが、意味的にはもちろん「上臈」が正しい。何故なら「臈」とは元来年季のことで、本来は年季を積んだ僧のことを「上臈」と称したが、平安中期頃から「女房」、すなわち女性の召使いに対しても使われるようになったとの知識は、『源氏物語』の冒頭、「いづれの御時にか」の続きに、その反対語の「下臈」が出てくるから、そこをやれば誰でも学ぶはずだが、現代の古典学習状況では、全員の頭にそれが定着しているかは非常に疑わしい。故に高橋の古典能力の高さは、こ

の一語からも窺えるのである。

また高橋は、『子連れ狼』で有名な、マンガ原作者（絵ではなくストーリーを作る人。最近の漫画家は分業制であるので割と多い）小池一夫が1977年に開いた「劇画村塾（げきがそんじゅく）」という、当時はまだ珍しかった漫画家養成学校の第１期生であるから、売れる作品を作るテクニックは一流と聞く。ならば、この「文学としてのマンガ」シリーズが明らかにしているように、古典的要素を持つ作品は、たとえ現代の読者にその素養が無かろうと必ず売れる傾向を有しているのであるから、それを用いている可能性は高いのである。

最後はやはり確率の問題になってしまったが、では何故読者に素養が無かろうと売れるのかということについては、今後も追及していきたいと思う。

## 注

1）　拙稿「文学としてのマンガ③――現代マンガにおける異界表現について――」（『宮崎大学教育文化学部紀要』　人文科学　第１号（1999年９月）。

2）　拙稿「文学としてのマンガ④――時と向き合った諸作品――」（『宮崎大学教育文化学部紀要』人文科学　第２号（2000年３月）。

3）　拙稿「文学としてのマンガ――現代版竹取物語・「セーラームーン」について――」（『宮崎大学教育学部紀要』　人文科学　第85号（1998年９月）。

4）　最近のアニメによる。当初の設定（小学館少年サンデーコミックス『犬夜叉』第１巻（1997年５月刊）第１巻第１話「封印された少年」P.13　３コマ目）では樹齢500年であったが、犬夜叉が封印された時既にそこそこの大木であったから、計算が合わないことに気づき、途中で訂正したらしい。

5）　四魂とは、高橋留美子著『犬夜叉　図説大全　奥義皆伝』（小学館　2003年４月）によれば、荒魂（あらみたま、『古事記』『日本書紀』にある神霊の動的・勇猛な側面を言う言葉（稿者注。以下同じ））・和魂（にぎみたま、同じく神霊の静的・穏和な側面を言う）・奇魂（くしみたま、神秘な力の宿っているもの）・幸魂（さきみたま、人に幸福を与える神の霊魂）のことだそうである。さらにその書によれば、人の心はその４側面のバランスからなるものであるそうだから、「四魂の玉」とは言っても、玉が４つあるわけではない。

6）　既に３）の拙稿でも説明したように、如何に原作のあるものをアニメ化すると言っても、たとえ同じく週１回でも原作とアニメでは進行速度が違う（言うまでもなくアニメの方が早いので、通常アニメ化されるのは、関連商品の販売等の都合で原作とアニメ等を故意に同時進行する、最近流行のメディアミックスでもない限り、原作コミックスが数巻蓄積されてからである）等の理由で原作が改変（付加）される場合が多い。この際、原作者がかなり細かく口を出す場合と余り気にせずアニメ監督にお任せの場合があるようで、高橋留美子の場合は後者と聞いているから、厳密には証拠としづらい面もある。しかしその高橋ですら、注１）の拙稿でも述べたように、『うる星やつら』の劇場版第２作『ビューティフル・ドリーマー』（1984年公開）の時には、出来上がった後に不満を漏らしたことがあるらしいから、この場合は、少なくとも黙認はしているのであろうと思い、証拠と数えることにする。

7）　アニメ第147－148話（アニメ『犬夜叉』公式ホームページ：http://www.ytv.co.jp/inuyasya による。通常は30分番組だが、この回は１時間スペシャルであったので、このような話数になるらしい）「めぐり逢う前の運命恋歌」

8）　拙稿「文学としてのマンガ⑤――「引用」について――」（『宮崎大学教育文化学部紀要』　人文科学　第３号（2000年９月）。なおこの問題については、同じく拙稿「「引用」とはどのように有効な視点か」（『国文学』　學燈社　2000年12月）も合わせて参観して欲しい。

9）　ロラン・バルト著、花輪光訳『物語の構造分析』（みすず書房　1984（第６刷））「作者の死」PP. 85～86。

10）　石原千秋・木股知史・小森陽一・島村輝・高橋修・高橋世織『読むための理論』（世織書房　1994（第５刷））「引用」の項。

11）　拙稿「テレビゲーム「サクラ大戦」の文学性」（『宮崎大学教育文化学部紀要』人文科学　第２号（2002年３月）。

12）　コミックス第１巻P.179　４コマ目の犬夜叉の科白。

13）　コミックス第２巻（1997年７月）第１話「結羅の巣」の最後から、第２話「窮地」の冒頭にかけて。

14）　コミックス第２巻第４話「半妖」末尾から第５話「母の顔」冒頭にかけて

15）　但し、十二単は平安中期にしか誕生しないから、平安初期に成立した作品である『竹取物語』のかぐや姫が着ているはずがなく、正しくは、1989年３月に上映された、藤川桂介の同名小説を原作とした角川アニメ『宇宙王子（うつのみこ）』中で「なよ竹」と呼ばれる彼女が着ている、天女あるいは乙姫風の、奈良時代の貴族女性が着る装束であることは、稿者も良く講義で説明するところだが、一般の認識が十二単であることは言うまでもなかろう。ただ、それを承知で、それでは画にならないからと、あえてかぐや姫に十二単を着せた市川崑監督の例（東宝映画『竹取物語』1987年上映プログラムによる）も存在するから、これを以て高橋留美子の古典力を云々することはできない。

16）　余談であるが、このアニメで示された、仏の御石の鉢は「土」、蓬莱の玉の枝は「木」、火鼠の皮衣は「火」、龍の頸の玉は「金」、燕の子安貝は「水」だから五行思想に基づくという解釈は、管見の故か、これまでの『竹取物語』の研究史に見えない。作り物の木である蓬莱の玉の枝が本当に「木」と言えるか、確かに貝は「水」の表徴と見ることができるが、「燕の」という言葉を冠した時もそれが可能か等という若干の問題は有するものの、神仙思想の影響が極めて強いとされる『竹取物語』という点を慮れば、一考の余地はあろう。

17）　これについては『犬夜叉』以前、同じく少年サンデーに連載されていた（1990年第６号～1996年第45号）藤田和日郎の『うしおととら』で、後に主人公うしおと共に妖怪退治をすることになる妖怪とらが、やはりうしおの家である神社に、妖怪を封印することが出来る「獣の槍」で張り付けになっていたことを引用するのではないかと指摘した学生がおり、確かに年代的には近いのだが、本を正せばそれも『西遊記』の引用と考えられるので、このように扱うことにした。

また、孫悟空が五行山に封じられていたのは500年であるから、犬夜叉の封印を解く定めを持ったかごめが、犬夜叉が封印された戦国時代から500年後の現代に転生する（逆に言えば、そうなるべく現代から500年遡った戦国時代に封印されたことにする）というのも、或いはこれと関わるかもしれない。尤も、『炎トリッパー』の例も出したように、高橋の戦国時代好きは窺えるところでもあるから、これについては断言できないが、犬夜叉にとってはその時間が10分の１の50年である理由は、その間の事情を楓から聞くとすれば、人間の寿命から考えてぎりぎりこのくらいであり、やはり関係はあろう。

18）　『西遊記』の原作をちゃんと読まれた方は御存知のように、八戒というのは仇名であり、本名ではない。三蔵法師の弟子はそれにふさわしく、悟空・悟浄と皆「悟」がついており、八戒も本名は悟能というのであるが、登場の話に顕著なように、彼は他の弟子より煩悩（特に性欲）が強く、そのため三蔵法師から、仏教用語の八戒（食欲・性欲等八つの欲望を戒めること）という仇名を貰い、絶えずそう呼ばれることによって欲望を押さえるよう言われたのである。これを知っていれば、八戒と弥勒の類同性を見抜くのは容易であろう。蛇足を加えれば、七宝と八戒は数字遊びと思われる。ついでに言うと『犬夜叉』には、これもアニメだけではあるが、猪九戒という女好きの妖怪も登場する（第129話「猪九戒と略奪された花嫁」）。

19）　高橋留美子もほぼ同年代であるから、或いはこれの引用かもしれない。

（2004年９月16日受理）